

母子寮むつみ荘が出来るまで

故・初代理事長 本橋 八重子

昭和十六年太平洋戦争から第二次世界大戦は、戦後に大きな傷跡を残し、中でも戦争未亡人の増加による母子家庭は、百万世帯を超えその生活は、大変悲惨な状態でありました。

この様な世相を憂いた、今は亡き参議院議員 山高しげり先生（全国未亡人団体会長）は、母子家庭の生活を少しでも潤わせたいと、相互に励まし助け合う組織作りに活躍され、昭和二十五年頃から、各地に母子寡婦福祉会の誕生をみただけであります。

戸田においても、昭和二十九年八月八日、熊木玉さんを会長に、戸田町母子福祉会を発足し、母子家庭の生活向上を目指し活動を開始し、活動資金源となる売店事業が始まりました。

当初は、非常にファン入場者も少なく思うような利益も上がりませんでした。が、会員一丸となって、励まし助け合っ少しの利益の中から何とか母子福祉会の事業も順調な歩みを見たのであります。しかし、昭和三十六年十月、東京オリ

ピック開催を理由に、戸田競艇が中断した為、売店も閉店のやむなきに至りました。

四年間の空白の後、昭和四十年十月それまで中止になっていた競艇場の再開設が具体化となり、母子会で売店をやらないかとの声がかかり、早速役員会を開き協議しましたが、中止前の経験者から入場者も少なく、あまり儲からなかったという意見があり、母子福祉会としては、売店を廃止する事に決めました。

ところが、早く再開するようにとの声をかけて頂き、再度役員会を開催して検討しましたが、誰一人先頭に立ってやってくれる人がおらず、小沼会長も困り果てて、私に是非やってほしいと再三要望されました。仕方なく未経験で全く自信はありませんでしたが、会長の熱意にうたれ、引き受ける羽目になってしまいました。

それからというもの、色々な設備・備品等を取揃える一方、従業員集めに駆けまわり、やっとの思いで十一月中旬、他の店舗より一ヶ月半遅れて開店しました。

当時、三階に九店舗・五階に三店舗あり、それに売上の悪い場所があるため、三階から五階・五階から三階へと一カ月

毎に引越して歩く事に決まりました。その苦勞といったら言い様がありませんでした。ともかく再開が急な為、主催者側の施設整備も間に合わない状態で、売店は露店同様でした。

朝、行ってみると定価表もポスターも皆、吹き飛んで跡形もなく、毎朝ポスター作りや大工作業に追われ、特に寒い日には、北風で手が真赤にかじかみ、ポスターを貼る事も出来ず泣いた事は、今でも忘れる事は出来ません。

この様な経過を経ながらも、売店の売上も順調な伸びをみる事が出来ました。

小沼会長の口癖であつた、「会の為に役立つものを後世に残したい」という、願望を会員全員が引継ぎ、母子会館の建設を決議しました。

昭和四十八年三月、母子会館建設についての陳情書と計画書を提出、当時の計画では、鉄筋二階建て、一階は身障児の託児所、二階には百五十人収容の会議室を備え、総工費四七八〇万円の母子会館が、昭和四十九年秋には完成する予定でありました。

ところが、野口前市長が急逝され、この事を境に情勢が一変し、母子福祉会の夢は無残にも打砕かれ、一千万円が宙に

浮いてしまいました。

その後、四年の間、再三役員会を開催し、施設作りを検討しましたが、良い案がなく行き詰まりを感じていたところ、昭和五十三年十一月、市営住宅入居者募集に会員が三十名応募しましたが、一名も入居できなかったとの報告があり、この報告を契機に母子寮建設の気運が盛り上がりました。

また同じ時期に、売店の経営内容に問題が生じ、経営を法人組織化する事を望む意見もあり、母子寮建設計画を決議、市役所を訪問し、民生部長に相談したところ、議会が始まるから、すぐに陳情書を提出するようすすめられ、早速書類提出したところ議会において採択となり、母子寮計画は、一歩前進を見たのであります。

それからというもの、県庁へ足を運ぶ事三年間、ようやく内示がおりたのが昭和五十六年六月の事でした。また、土地問題について市長との相談の結果、市の土地を無償貸与にする事が決定となり、この間、市当局及び関係諸機関のご協力により、今日の立派なむつみ荘が完成し、昭和五十七年四月一日を以って開始の運びとなりました。（十周年記念文集より抜粋）